

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 7日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820056

研究課題名（和文） 非常時のメディアにおける表現の自由について—谷崎潤一郎訳源氏物語を一事例として—

研究課題名（英文） About the freedom of the expression in an emergency —*The Tale of Genji* translated by Tanizaki Jun'ichirō as the example of one thing—

研究代表者

西野 厚志 (NISHINO ATUSHI)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：00608937

研究成果の概要（和文）：谷崎潤一郎は生涯で三度「源氏物語」の現代語訳に取り組んだが、最初の戦中の訳からは当時の国家主義的思想に抵触する記述が削除されている。「源氏物語」の、そして谷崎のどこが危険視されていたのか。谷崎の撰取した同時代の思想（オットー・ヴァイニンガー、プラトニズム）や、全集未収録書簡などの一次資料、さらに思想的・理論的言説を参照することで、谷崎潤一郎による文学的営為の現代性（アクチュアリティ）を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：During his lifetime, Tanizaki Jun'ichirō essayed translations of *The Tale of Genji* into modern Japanese three times. In the first of these, carried out under World War II, parts of original that conflicted with the nationalist ideology of the time were omitted. Which parts of *The Tale of Genji* and the works of Tanizaki was found dangerous? The contemporary relevance—Actuality—of literary act by Tanizaki Jun'ichiro was made clear, by considering the thought of the time that influenced Tanizaki—the thought of Otto Weininger or Platonism—, together with primary materials—unpublished letters of Tanizaki—, and Literary theories.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：谷崎潤一郎、山田孝雄、源氏物語、古典享受、言文一致、オットー・ヴァイニンガー、プラトン思想、映画制作

1. 研究開始当初の背景

谷崎潤一郎は、『潤一郎訳源氏物語』全26巻（1939～1941）、『潤一郎新訳源氏物語』全12巻（1951～1954）、『潤一郎新々訳源氏物語』全11巻（1964～1965）と、戦前戦後にかけて三度「源氏物語」の現代語訳に取り組んでいる。その成立過程についてはこれまで手付かずのままであったが、近年、戦後の「新訳」で口述筆記を担当した伊吹和子が『われ

よりほかに—谷崎潤一郎最後の二二年間』（1994）、『めぐり逢った作家たち』（2009）で制作の舞台裏について証言をし、その内幕を明かしている。また、2003年には芦屋市谷崎潤一郎記念館「谷崎潤一郎訳「源氏物語」の世界」展で戦前の「旧訳」自筆原稿、「新訳」作成に使用された谷崎・山田・新しく校閲に加わった玉上琢弥の「旧訳」手沢本と書き入れタイプ原稿が展示され、2007年にも

再度「谷崎源氏」展開催、小論文集『潤一郎訳源氏物語考』が発行された。その後、「新訳」関連資料は記念館より國學院大学へ移管、秋澤互「谷崎源氏と玉上琢彌—國學院大學蔵『潤一郎新訳源氏物語』自筆草稿から」（『國學院雑誌』2008・10）、大津直子「二つの谷崎源氏—國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿より見る一考察」（『文学・語学』2010・3）等で調査報告がされている。まさに、いま、「多くの専門家と助手を巻き込んだ非常に入り組んだ共同作業の産物」（伊吹和子、ゲイ・ローリー著／拙訳「「谷崎源氏」端緒、経過、再考」『谷崎潤一郎 境界を越えて』2009）の生成過程が解明されつつあるのだ。

しかし、日中戦争から太平洋戦争へと向かう国家が統制強化する中でなされた最初の訳業（「旧訳」）、とりわけ、ロイヤリティとセクシュアリティという禁忌に触れる物語内容から当時「不敬文学」とまで呼ばれた「源氏物語」が一部削除したうえで出版された経緯については、ほとんど明らかにされていない。どのような表現が、なぜ危険視されたのだろうか？

以上の疑問に答えるために、これまで研究代表者は「谷崎源氏」の校閲者（アドバイザー）・山田孝雄の果たした役割を中心に研究を進めてきた。そのなかで、山田が蔵書に残した削除を指示する書き込み（「削ル」という朱文字）が発見され、そして、未発表書簡の内容分析からの谷崎による自主規制の事実も発覚した。その成果発表は、「不敬文学と呼ばれた昭和10年代—源氏物語あちこち「削ル」」（『朝日新聞』2006・5・31）として、また、「源氏千年紀」にあたる2008年には「戦時下、「不敬の書」に」（『日本経済新聞』5・27）、「戦争と教育「最高峰」を時局も利用」（『朝日新聞』8・14）として社会的な反響を呼び、さらに、「源氏千年紀」を記念したNHK制作のテレビ番組「源氏物語 一千年の旅～2500枚の源氏絵の謎～」(11・5)と「私の源氏物語～千年語り継がれたロマン～」(同・16)にも出演、「谷崎源氏」の削除問題を解説するなど、時代状況と「表現の自由」との関係について持続的に問題提起をしてきた。

以上の研究成果を踏まえたうえで、本研究課題は、「源氏物語」と谷崎潤一郎の作品を事例として取り上げながら、非常時における表現の自由の在り方を検討するものである。

2. 研究の目的

研究代表者がこれまで谷崎潤一郎訳「源氏物語」の校閲・削除を研究してきた背景には、紅野謙介『校閲と文学 1920年代の攻防』（2009）やジェイ・ルービン『風俗壊乱 明治国家と文芸の校閲』（2011）、『校閲・メデ

ィア・文学 江戸から戦後まで』（2012）の刊行、また戦後の検閲資料を収蔵するブランゲ文庫「占領期雑誌記事情報データベース」の公開（2002）とその成果『占領期雑誌資料大系』（2009～2010）など、検閲研究における近年の目覚ましい進展がある。本研究課題も以上の動向と相互に寄与し、一つの事例を提供するものである。

だが、本研究課題が対象とする戦時下版「谷崎源氏」の削除問題には、過去の一事例にとどまらない現在性（アクチュアリティ）が含まれている。それは、以前、研究代表者の成果を報じた記事にあったように、「源氏物語」が「不敬」の文学と呼ばれた時代の重圧を忘却するならば、今度はどんな「物語」に「削ル」と書き込まれるかわからない（「谷崎源氏の編集者回想記「削ル」が伝える重さ」『朝日新聞』2006・6・12、夕刊）からだ。そして、そこには、「自主規制」のような複雑な問題も潜んでいる。

これまで研究代表者は、「谷崎源氏」の校閲・削除問題に関して研究を進めてきたが、そのなかで、一方的に削除を命じていたとされてきた校閲者・山田孝雄だけでなく、谷崎自身も自発的に削除に加担していた事実が発覚した。結果、「抑圧者＝山田孝雄／被抑圧者＝谷崎潤一郎」という二項対立的な図式による事態の理解が問い直されることとなった。しかし、その狙いは、新たな真犯人捜しに終始することや、「確かに戦時下版「谷崎源氏」の削除処置は大部分が山田孝雄の指示に起因するが、幾らかは谷崎にも責任がある」といったような、責任の再配分・軽減にあるのではない。むしろ、戦時下版「谷崎源氏」という過去の事例を通して、表現の規制といった問題の現代性（アクチュアリティ）を見極めることで、非常時における「表現の自由」の可能性を自らの問題として引き受け、言論発表にともなう新たな「責任」概念を検討することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 「谷崎源氏」の校閲者を務めた国語学者・山田孝雄の学術的言説（国語論・文学論など）と政治的言説（国体論）とを比較し、両者の共通点から、国語の成立（言文一致運動による、共同体内で流通する共通言語の創出）と国家体制の構築の関係性を検討する。そして、その思想の帰結としての「谷崎源氏」への校閲方針を炙り出す。

(2)、新旧「谷崎源氏」に見られる表現特質の読解から、校閲者・山田孝雄と翻訳者・谷崎潤一郎が削除問題で果たした役割を明らかにする。背景にある、「源氏物語」をはじめとする近代の古典享受を巡る同時代言説や、国家主義思想の諸相、そして校閲制度の展開を踏まえ、削除版「谷崎源氏」の不完

全な本文が映し出す、日本の近代性（モダニティ）の諸相（文化・社会・政治や権力作用）を明らかにする。

（3）谷崎潤一郎が、同時代に流布していた思想（オットー・ヴァイニンガー、プラトン哲学）や自身も制作に関わった映画から得た要素をどのように文学活動に活用し、結果、山田孝雄に代表されるような国家主義思想と対峙することとなったのか。谷崎作品を同時代言説から読み直すことで、その可能性を探る。

4. 研究成果

「研究の方法」で述べた三点を総合し、博士論文としてまとめ、一部を研究論文として学術雑誌に発表した。今後、まとめた成果全体を刊行する予定であるが、以下に、具体的な研究成果としてすでに発表した論文の概要を説明する。

（1）谷崎潤一郎作品に見られるプラトニズムの影響を、谷崎が参照したという英訳プラトン全集 *The Works of Plato, 6 vols.*, Bohn's Classical Library, London: GEORGE BELL AND SON, 1848-54. をもとに検証した。谷崎が作中引用した全集第二巻には、有名な〈洞窟の比喩〉が登場する「国家 *The Republic*」が含まれる。この寓話の内容と映画の上映形態が類似しているという指摘を踏まえて、プラトニズムと映画から触発された、谷崎作品中の〈観念 Idea〉というプラトンの術語の使用例と、盲目についての視覚表現を考察する。具体的には、プラトニズムの究極目的（光そのものを見ること）と、「可燃性フィルム Nitrate film」が燃焼して映像が消滅する現象との関係に注目した。そのうえで、「春琴抄」（1933）等の盲目を主題とする作品群が、過剰な光が引き起こす〈表象の零度〉を表現したものだと論じ、同時代の全体主義を巡る言説と比較した。（論文①として発表）

（2）明治期から大正・昭和初期にいたるまでの言文一致運動を概観し、また、同時代言説や哲学・思想などをひろく参照し、「源氏物語」の現代語訳で協働することになる山田孝雄と谷崎潤一郎が、日本語論で共有している枠組みを取り出した。

国家体制が整備されるなかで、共同体内で共有される言語が構築される過程が言文一致（音声言語と書記言語の重ね合わせ）であるが、それは「話者の顔の見えない話し言葉」を理想とするという、きわめて倒錯した、フィクショナルな理念が小説に強いられることであった（安藤宏『近代小説の表現機構』）。そこで中心化したのは、文末表現の調整という問題である。待遇表現を含む多様な文末詞が一元化されたことによって人称詞の明示が必要になり、〈主語＋述語〉という近代の日本語の基本形が創出される。このこ

とを、柄谷行人（『日本近代文学の起源』再考 - I、II）や野口武彦（『三人称の発見まで』）は、文末が「た」に一律化されて主述がそろった文章によって、客観的なリアリズムの描写が可能になったとする。対して、「である」体説を提起した絳秀実の論（『日本近代文学の〈誕生〉』等）から、言文一致運動中の文末詞「である」を巡る言説を追跡した。

谷崎潤一郎訳「源氏物語」の校閲者・山田孝雄はその日本語論において、文という意味単位を構成するために不可欠な〈統覚作用＝陳述の力〉を提起した。そして、その作用は文末詞、特に「である」という語に宿るとして、それを〈存在詞〉と名付けた（『日本文法論』等）。一方で、谷崎潤一郎は、それを「のである口調」と呼び、何度か論じているが（『文章読本』等）、両者は、「倒錯した、フィクショナルな理念」としての言文一致を反映するかのようにして、その定義が逆説的で、一定しない点で共通している。言語によって言語を体系化して記述しようとするれば、必然的に逆説的な要素、剰余が生み出される。「源氏物語」の現代化に校閲者・翻訳者としてそれぞれ関わった山田と谷崎が同じく遭遇した言語の剰余、「である」という文末詞が言文一致の一掃結であることを明らかにした。（論文②として発表）

（3）オットー・ヴァイニンガーの主著『性と性格』（1903）は、その反ユダヤ的かつ女性蔑視的な傾向からナチスに利用された一方で、かのヴィトゲンシュタインを魅了したことで知られる。同書は日本でどのように受容されたのか。これまで個々の作家との関係で個別に論じられてはきたものの、どれほどの範囲と深度で影響をふるったのかを明らかにするような論考はなかった。だが、実は、芥川龍之介・谷崎潤一郎をはじめとして、森鷗外や西田幾多郎、与謝野晶子、有島武郎・武者小路実篤らの白樺派から、和辻哲郎、萩原朔太郎、大岡昇平、三島由紀夫まで、多くの作家が言及している隠れたベストセラーであった。そこで、作家それぞれの受容を同時代言説として並置し、相互に比較検討した。

ヴァイニンガーには、二つの相反する思想が奇妙に同居する。その二律背反する読解可能性のうち、どちらを選択するかによって評者の立場が決定される。すなわち、男女の別は乗り越えがたい差異であるという〈性差の絶対化・固定化〉と、全ての男女は両性を併せ持っており境界は不確定だとする〈性差の相対化・流動化〉である。前者の見方は、特に、天災、あるいは戦争や革命といった「例外状態（日常的な秩序が機能停止した状態）」に反動的な思想として現れることが多い。そこで、後者の可能性を現代思想等参照しながら、個々の作家の受容の様相に読み取った。

二極化するヴァイニングァー評価の典型として、それぞれ芥川龍之介（＝性差の絶対化・固定化）と谷崎潤一郎（＝性差の相対化・流動化）の作品を読みながら、同時代に開いていくことで、前者の女性嫌悪（ミソジニー）と、後者の多様な性に対する肯定的姿勢といった作家の個別特殊な傾向が、広く同時代に共有されていたことを示した。さらに、近年ヴァイニングァーが取り上げられる際に、それが先の東日本大震災後の状況にも関連することを検証して、その現代性を提示した。

（論文③として発表）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 西野厚志、「明視と盲目、あるいは視覚の二種の混乱について—谷崎潤一郎のプラトン受容とその映画的表現—」、『日本近代文学』、日本近代文学会、88集、pp. 一、2013、査読あり
- ② 西野厚志、「言文一致の〈残りのもの〉—山田孝雄の「存在詞」と谷崎潤一郎「のである口調」—」、『学術研究』、早稲田大学教育・総合科学学術院、61集、pp. 15—34、2013
- ③ 西野厚志、「カフカ少年は光源氏の夢を見るか」、『ユリイカ』、青土社、44巻9号、p. 238、2012
- ④ 西野厚志、「研究動向 谷崎潤一郎」、『昭和文学研究』、昭和文学研究会、65集、pp. 95—98、2012
- ⑤ 西野厚志、「日本におけるヴァイニングァー受容—芥川龍之介・谷崎潤一郎作品を中心に—」、『学術研究』、早稲田大学教育・総合科学学術院、60集、pp. 21—36、2012

〔学会発表〕（計2件）

- ① 西野厚志、「レッシング「ラオコーン」受容について—芥川龍之介と谷崎潤一郎を中心に—」、国際芥川龍之介学会、Seattle, USA、2012年10月
- ② 西野厚志、「芥川龍之介と谷崎潤一郎—ヴァイニングァー受容を視座として—」、国際芥川龍之介学会、中国・北京、2011年10月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西野 厚志 (NISHINO ATUSHI)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手
研究者番号：00608937